

# 「わが村は美しく」コンクールにみる集落景観の保全・創出を評価する視点

武内和彦\*

Bewertungsaspekte aus der Sicht von Landschaftspflege und-gestaltung beim Bundeswettbewerb "Unser Dorf soll schöner werden"

Kazuhiko TAKEUCHI

摘要：西ドイツでは、隔年に「わが村は美しく」コンクールが開催され、快適な「村づくり」の促進に役立っている。本稿では、第14回コンクールの審査会に参加した筆者の経験をもとに、コンクールの概要・特色を紹介し、評価結果の分析を通じて、農村集落の景観とアメニティの保全・創出を評価する視点について考察した。最近の審査では、建築デザイン中心の審美的評価から、アメニティや生態系の保全・創出へと評価の視点が広がっているのが特徴といえる。

## 1. はじめに

景観とアメニティに対する関心が、急激に高まっている。農村地域でも、最近、集落環境の整備が重要な課題となりつつあり、農村の景観とアメニティを保全し創出する試みは、今後ますます重要となるにちがいない。

こうした試みが成功するためには、地域住民の共通の価値観の形成と、「村づくり」への積極的な参加が不可欠である。行政サイドでは、これまでも住民の意識を高め、住民参加を促すような各種のイベントを企画してきた。そのひとつが、優良な村を表彰するコンクールの主催である。最近の例としては、国土庁と（財）農村開発企画委員会の共催による「農村アメニティ・コンクール<sup>2)</sup>」がある。

農村整備の進んだ西ドイツでは、1961年以来隔年に「わが村は美しく Unser Dorf soll schöner werden」コンクールが開催され、全国的な盛り上がりを見せていることは周知のとおりである。<sup>3)4)</sup> わが国でも、これを範として、同名のコンクールが農林水産省と日本農村振興協会により行われている<sup>5)</sup>

筆者は、第14回目にあたる「わが村は美しく」コンクールの連邦審査会のゲストとして1987年8月24日から9月8日にかけて行われた現地審査旅行に参加した。本稿では、この「わが村は美しく」コンクールの概要・特色を紹介するとともに、審査過程を通してみたドイツ農村集落の景観形成の特質を分析し、農村集落の景観とアメニティの保全・創出を評価する視点について考察してみたい。

## 2. 「わが村は美しく」コンクールの概要と特色

### (1) コンクールの開催

このコンクールでは、まず郡、県、州の審査が行われ、金賞、銀賞、銅賞が授与される。1987年度には、ここまでの段階で約5,500の集落が審査の対象となった。このコンクールがはじまってからこれまで、審査の対象となった集落数は、のべ60,000以上にのぼる。

連邦レベルのコンクールは、ドイツ連邦食料農林省が主催しており、連邦空間整備・住宅都市建設省、ドイツ農業中央委員会、ドイツ造園協会が共催団体となっている。連邦レベルの候補の集落は、すべて州レベルで金賞を授賞していることが前提となり、1987年度は表1、図1に示すように31の集落が候補となった。連邦レベルの審査が行われる前の段階ですでに、全立候補集落の1%以下に候補が絞られているのである。

連邦審査会の役割は、これらの集落を実際に見学して、「村づくり」の現状について説明を聞き、景観等を総合的に評価して、金賞、銀賞、銅賞を決定することにある。1987年度のコンクールの最終的な表彰は、1988年2月の「緑の週間」期間中にベルリンで行われ、Kiechle 食料農林大臣とBernadotte ドイツ造園協会会長から各賞が授与された。

### (2) 審査の基準と表彰

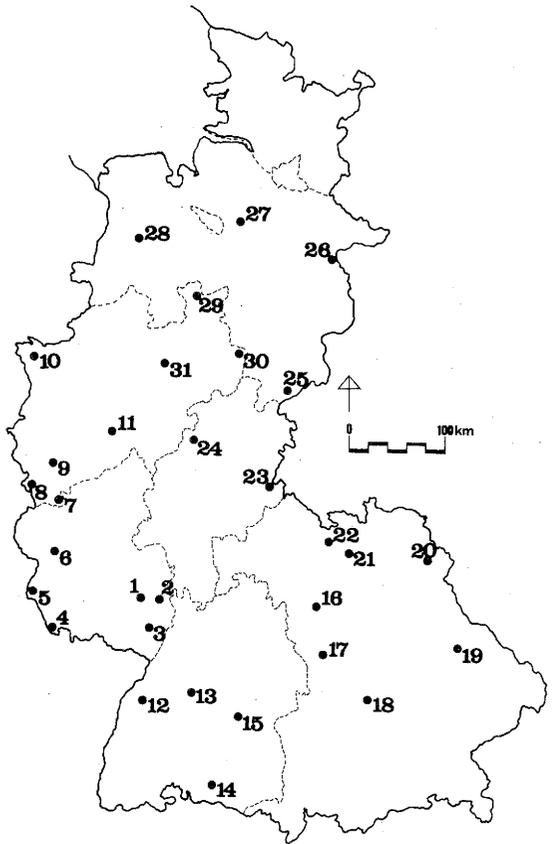
立候補の資格を持つ集落は、人口3,000人以下の農村的色彩の強い独立集落であり、必ずしも行政的な村であることを要しない。連邦レベルで立候補できる集落の数は、州レベル以下のコンクールに参加した集落の数に応じて州ごとに決められており、最小は100以下の場合で1集落、最大は1,100以上の場合で7集落が連邦レベルのコンクールに立候補できる。ただし、シュレスビヒ・ホルシュタイン州は、3年に1回しか州のコンクールを実施しないため、この州が不参加となる年がある。19

\* 東京大学農学部

表一 連邦レベルで審査の対象となった集落

番号	集 落 名	州	人口(人)
1	Neuleiningen	RLP	730
2	Großkarlbach	RLP	1,004
3	Rhodt u. Rietburg	RLP	1,160
4	Karlsbrunn	SL	1,150
5	Wochern	SL	145
6	Bruch	RLP	450
7	Ohlenhard	RLP	164
8	Höfen	NRW	1,840
9	Muldenau	NRW	161
10	Hasselt	NRW	1,731
11	Hulsenbusch	NRW	744
12	Tiergarten	BW	839
13	Holzbronn	BW	551
14	Sipplingen	BW	2,125
15	Upfingen	BW	800
16	Ickelheim	BY	610
17	Ostheim	BY	378
18	Hohenried	BY	440
19	Michelsneukirche	BY	650
20	Lengenfeld	BY	126
21	Roth	BY	68
22	Unfinden	BY	360
23	Rimmels	HS	228
24	Haine	HS	535
25	Gelliehausen	NS	438
26	Lüben	NS	122
27	Waffensen	NS	795
28	Auen-Holthaus	NS	240
29	Tonnenheide	NRW	1,225
30	Elbrinxen	NRW	1,354
31	Sünninghasusen	NRW	1,321

RLP: Rheinland-Pfalz      SL : Saarland  
 NRW: Nordrhein-Westfalen      BW : Baden-Württemberg  
 BY : Bayern      HS : Hessen      NS : Niedersachsen



図一 審査の対象となった集落の分布  
(集落名は表1参照)

87年度は、ちょうど不参加の年にあたった。

審査は、5項目に分けられ、合計が百点満点になるようにあらかじめ配点が決まっている。審査は、各候補集落を対象に、各項目2人ずつ、全体の統括に1人、計11人によって行なわれた。審査期間が長いので、審査者が途中交代する場合があります、審査者の総計はこれを上回っている(表2)。

評価は、5項目であるが、配点はすべて同じというわけではない。建築や緑のデザインに関連する項目は、この審査の重点項目として他の項目よりも高い点数が配分されている。5評価項目とそれらの具体的な内容を列記すると、以下のようである。なお、項目のあとに付したのは、各項目の配点である。

1) 全般的な集落の発展とデザイン(10点):

村全体の発展という点からみた集落の主たる機能。村の計画の現状、質、実現性。建設・公共用地の位置とデザイン。新しい開発地とのつながり。道路、小路、広場、水辺地の規模とデザイン。給排水設備の整備水準。農村らしさを保っていること。

2) 住民活動と相互扶助(15点): 住民主導による文化的・社会的な組織。小グループ、青年団、老人の世話役。文化的な催し。風俗の伝承、むらまつり。自治体の活動、相互扶助。

3) 集落の建築デザイン(30点): 公共の領域: 建物と施設の状態。歴史的建造物の保存、保

全、利用。集落の中心部のデザイン。広告。個人の領域; 集落を特徴づけている建物の保存、保全、利用。古い集落内の新・改築に際して、モダンな建築様式や建築材料を集落にふさわしいものに変えていること。新しい開発地でも同様な工夫を試みていること。大規模な農用施設、工業・産業施設のデザインと配置。

4) 集落の緑のデザイン(30点): 公共の領域; 土地条件にみあった植物を用いた集落全体の緑化。墓地を含む

表二 連邦審査会の構成

評価項目	審査員名	審査員の選出母体
B 全般的な集落の 1 発展とデザイン	Becker Dr Kalesky	連邦空間整備・住宅都市建設省 ドイツ郡協議会
B 住民活動と 2 相互扶助	Küster Dr Spitz	ドイツ市町村連合 連邦食料・農林省
B 集落の建築 3 デザイン	Caesar Gerhards/ Prof Strack	ドイツ文化財保護国内委員会 ボン大学都市工学科
B 集落の緑の 4 デザイン	Prof Mrass Schmitz	連邦自然保護・地域生態学研究所 ドイツ農村婦人連盟
B 村の景観 5 構成	Krausch/ Prof Olschow Nahry	ドイツ造園協会 ドイツ農業中央委員会
総括	Dr Ring	連邦食料・農林省

公共緑地のデザインと管理。公共建築物の花と緑。動植物の生息・生育地の保護と拡大。個人の領域；公的領域や景観とのむすびつき。前庭の造園と管理。庭と菜園のデザインと管理。家と中庭の花と緑。土地条件に適した美しく価値のある植物の選択と多様さ。きわだった緑のデザイン要素。

5) 村の景観構成(15点)：集落まわりのデザイン。景観の中のつながり。土地条件に適した動植物種の保存と育成、種と小生物空間の保護。特色ある景観構成要素と保護的価値の高い対象の保存、保全、開発。耕地区画の景観保全措置とインパクトの緩和措置。余暇・レクリエーション施設の自然風景的デザイン。景観計画と景観保全的付随計画の導入。

### (3) 最近の評価の重点

「わが村は美しく」コンクールにおける農村集落を評価する視点は、大きく変化している。それは、まず、単なる景観美を重視する立場から、快適性を含めた住みやすさを評価する立場への転換である。コンクールの名称についても「美しく schöner」という言葉を「より良く verbessert」に変えるべきであるとの意見も出されている。しかし、このコンクールの名前は西ドイツ全土ですでに定着しており、主催者側は名称の変更には慎重である。

また、最近とくに重要視されるようになった評価項目として、小生物空間 Biotop の保全・創出を中心とする生態系の保全があげられる。これは「緑のデザイン」や「村の景観構成」の中に含まれる項目であるが、緑や景観を単に美観的な側面のみからとらえるのではなく、それらのもつ生態学的な意味を併せて評価しようとしているのである。

このように、単なる審美的評価にとどまらず、アメニティ、生態系の保全・創出へと評価の視点が広がっているのが、最近の「わが村は美しく」コンクールの大きな特徴といえる。

## 3. 評価結果の分析と農村集落の類型化

### (1) 分析の方法

つぎに、こうした評価の傾向を、審査会による個々の

集落の評価結果に基づいて具体的に検討してみた。分析の対象としたデータは、候補集落ごとの各評価項目の得点、総合得点（およびそれに基づく金賞、銀賞、銅賞の区別）である。なお、各賞以外は、非公開のデータとなっている。これらのデータについて、以下のような分析を行なった。

まず、各個別評価項目の得点相互、およびそれらと総合得点（個別得点の総和）の相関をみた。つぎに、各評価項目を変数とし、集落をサンプルとして主成分分析を行ない、得られた2因子についての解釈を試みた。さらに、集落別の因子得点を座標づけするとともに、得点をワード法でクラスタリングして、評価結果からみた集落の類型化を行なった。最後にその結果と金賞、銀賞、銅賞の対応をみて、農村集落の景観とアメニティの保全・創出を評価する構造についての考察を行なった。

### (2) 個別評価と総合評価

個別・総合評価項目間のピアソンの相関係数を表3に示す。この表から、個別項目間では、「集落の緑のデザイン」と「村の景観構成」の間のみ明確な相関のあることがわかる。両者ともが、緑を重視する評価項目であり、また最近では、ともに生態系の保全と創出に重点を置いているため、評価の傾向が類似するようになったものと考えられる。

また、個別評価と総合評価の関連を見ると、「集落の緑のデザイン」が総合評価と極めて相関の高いことが注目される。ついで「集落の建築デザイン」との相関が高くなっているが、配点が10点しかない「全般的な集落の発展とデザイン」との相関が同程度に高いことも興味深い結果である。これは、「集落の緑のデザイン」が総合評価のいわば牽引となり、また「全般的な集落の発展とデザイン」が総合評価の指標となっていることを示唆するものであろう。

### (3) 主成分分析

#### 1) 個別評価結果に基づく因子の抽出

5つの評価項目を変数（データはそれぞれの得点）とし、31集落をサンプルとして主成分分析を行なった。その結果、固有値が1以上となる2つの因子が得られた（表4）。

表-3 評価項目間の相関(ピアソンの相関係数)

	B 1	B 2	B 3	B 4	B 5
B 1 全般的な集落の発展とデザイン					
B 2 住民活動と相互扶助	0.430				
B 3 集落の建築デザイン	0.344	-0.080			
B 4 集落の緑のデザイン	0.446	0.389	0.433		
B 5 村の景観構成	0.220	0.290	0.030	0.604**	
総合評価	0.645**	0.485*	0.684**	0.891**	0.531*

\* 0.1%水準で有意

\*\* 1.0%水準で有意

表4 因子負荷行列

変数	FACTOR 1	FACTOR 2
A 1	0.725	0.144
A 2	0.613	-0.533
A 3	0.453	0.841
A 4	0.878	0.082
A 5	0.666	-0.347

第1因子は、説明率46%で、因子負荷量がすべて正となっている。この因子は、個別評価間の共通的性格をあらわす軸であると解釈される。「集落の緑のデザイン」や「全般的な集落の発展とデザイン」といった因子負荷量の高い項目は、全体的な評価の傾向により従順であると判断される。

第2因子は、説明率23%で、因子負荷量は正と負の対立を示す。正に高い項目は、「集落の建築デザイン」であり、逆に、負に高い項目は「住民活動と相互扶助」および「村の景観構成」である。この因子は、評価の視点の違いに基づく個別評価間の差異を表現した軸であると解釈される。具体的には、建築デザインといった物的側面と、住民運動といった人的・社会的側面に評価の視点が分かれている。

#### 2) 因子得点の座標づけと集落の類型化

各農村集落の因子得点を座標づけした(図2)。評価結果からみた集落間の類型化を行なうために、2因子の得点をワード法でクラスタリングし、偏差平方和が0.1となるレベルで分類した。その結果が図2のAからDまでである。この図には、それぞれの集落が、金賞、銀賞、銅賞のどれを授賞したかも示してある。

Aは、第1因子の得点が高く、第2因子の得点は原点に近い。すなわち、評価は全般的に良好であり、評価の偏りも小さく、バランスのとれた良好な景観とアメニティの保全・創出が行なわれている集落群であると判断される。結果的に、このグループのすべての集落が金賞を授賞してい

る。

Bは、第1因子の得点が原点近くにあり、第2因子の得点は正に偏っている。このグループは、建築デザインを中心とした物的な景観形成がとくに評価された集落群であると判断される。これらの中で、全体の評価傾向を示す第1因子の得点が正の集落群は金賞、負の集落群は銀賞を授賞している。

Cは、第1因子の得点が原点近くにあるが、第2因子の得点が負に偏っているグループであり、自然保護を含む住民活動が活発なことによって性格づけられる集落群である。第2因子を負に向ける項目の全体評価に占める比重が小さいため、第1因子の得点分布はBに類似しているにもかかわらず、最終評価は1ランク低く、銀賞ないし銅賞の対象となっている。

Dは、第1因子の得点が全般的に低く、また第2因子の得点は原点付近に分布している。このグループは、評価が全般に低い集落群であり、その見解は項目の如何にかかわらず、よく一致しているといえる。

#### (4) 典型的な農村集落

以上のようにして類型化されたA B C Dのグループの中からそれぞれ代表的な1集落を選んで、その特徴を見てみたい。それぞれの集落名のあとに付記したのは、審

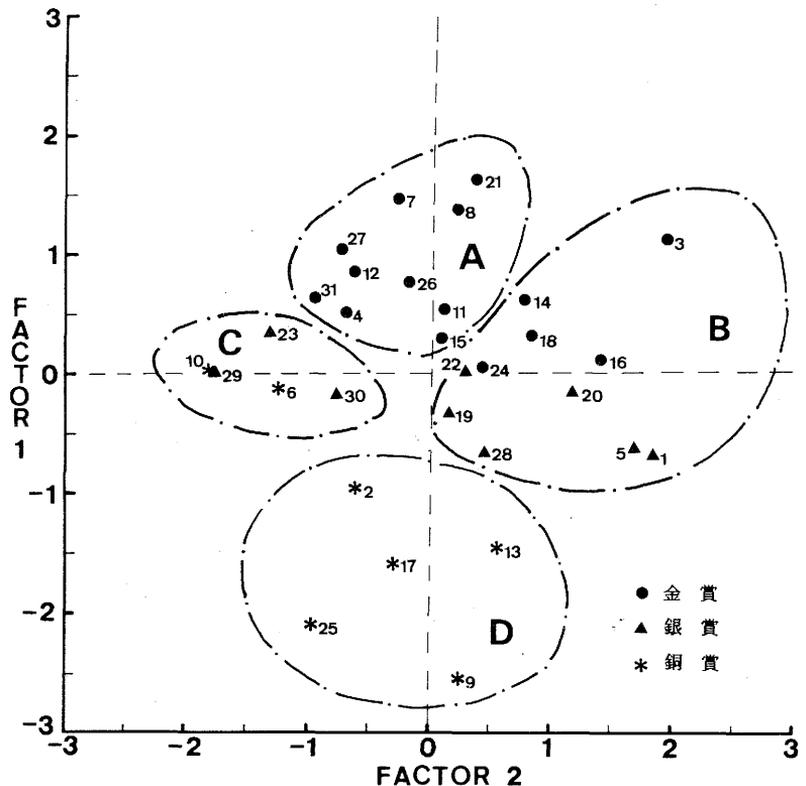


図-2 因子得点からみた各集落の座標づけ

査番号(表1)である。

#### 1) Roth (21) - Aグループの例

この集落の人口はわずか68人である。しかし、中心広場、ゲストハウス、チャペル、墓地など必要な公共・公益施設はすべて整っており、立派に自立した集落を形成している(写真1)。

この集落では、住民が一体となって、広場の大木の保存、遊技場の建設、自然保護地(池と湿地)の創出(写真2)、耕地の景観保全に努めていることが高く評価された。また伝統的な家屋の保存に努め、建築デザインの評価も高かった。その結果、すべての項目で非常に高い評価が得られたのである。この集落には、当然のこととして、金賞が授与されることになった。

#### 2) Wochern (5) - Bグループの例

フランス、ルクセンブルクとの国境に隣接したこの集落は、しばしば戦火に見舞われ、幾度となく廃虚からの復興を繰り返してきた。

この集落では、農家の家屋(納屋を含む)を再生することに「村づくり」活動の重点がある。集落内には、至るところ修復・再生中の家屋がみられ、再生前後を空間的に比較することができる(写真3)。再生にあたって、玄関のドアにはとくに装飾が施され、住民が審美的な価



写真1 Rothにおける村の景観構成



写真2 小生物空間創出のために新たに設けられた湿地



写真3 Wochernにおける再生前後の農村家屋

値に重きを置いていることは明かである。ここでは、緑のデザインをはじめとして、建築以外の項目の評価は全般に低いため、総合評価では銀賞のレベルに留まった。

#### 3) Hasselt (10) - Cグループの例

北ドイツ平原に位置するこの集落は、平地村であり景観的な変化に乏しい。この集落では、村の森を自然保護地に指定するなど生態系の保全には配慮しているが、全体としての景観形成という点では不十分である。

この集落で特筆すべきは、農村婦人Landfrauの活動であり、それがこの集落を活性化している点が高く評価された。評価についても、建築や緑のデザインといった項目の評価は低いが、全般的な集落の発展や住民活動に関する項目では非常に高い評価が得られた。しかし、全体としての得点は低く、結果的に銅賞が授与されることになった。

#### 4) Gelliehausen (25) - Dグループの例

近隣の都市ゲッチンゲンまで12km、都市住民の混入が著しい集落である。旧住民と新住民の間にまとまりがなく、集落景観も不統一である。

とくに問題になったのは、屋根の形が不揃いだということであり(写真4)、伝統的な屋根の形態を尊重して、地区詳細計画B-planで全体のバランスをとるよう強く指導すべきであったとの意見がでた。ここでは、周辺の景観が良好なため「村の景観構成」が高く評価されたほかは、全般に評価が低かった。

ある審査員によれば、「この村は何か悪いことをした訳ではない、ただ何もしなかっただけだ」ということである。この集落も銅賞に決定したが、連邦レベルで審査の対象となったこと自身に疑問が残る集落であった。

#### 4. おわりに

以上みてきたように、集落の評価は全体として良いものを良いという共通の視点と、ある特定の項目に偏って評価する視点のあることがわかった。そうした中で、全評価項目が一定水準以上で、景観とアメニティの保全と創出にかかわる諸活動の全体のバランスがよくとれてい

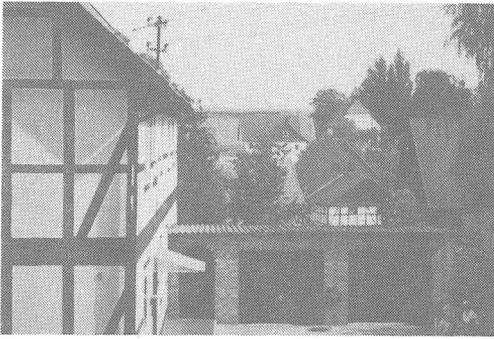


写真4 Gelliehausen にみられる不揃いな屋根

る集落は、常に高い評価を得ている。今後、新たな「村づくり」を展開していく場合には、こうした点を考慮することが重要であろう。

また、建築デザインに関する評価の独自性が高いことは、たいへん興味深い結果である。のべ6,300 kmにおよぶ審査会のバス旅行の途中、「集落の建築デザイン」を評価する審査員が他の審査員と対立することがしばしばあった。それは、コンクールの評価の重点が生態系の保全や住民活動に移行することに対しての、審美性を重視する立場からの強い反発ではないかと思われた。分析の結果は、こうした審査会の議論の内容をよく反映したものとなった。

西ドイツでは、農村の構造変化がすすむ中で、政策の重点が、農地整備から村落再整備を含むトータルな農村整備へと発展した<sup>2)</sup>。一方、国土全域にわたる混住化の進行は、村落再整備に際して、非農家をどう取り込むかといった新たな問題を生みだした。「わが村は美しく」コンクールの背景には、こうした農村をとりまく状況の変化があり、コンクール参加をつうじて新たな合意形成を

図ろうとする行政側の意図は十分達成されている。

わが国でも、集落地域整備法の制定にみられるように、今後、混住化の中での集落整備に農村計画の重点が置かれるように思われる。そうした中で、農村集落の景観とアメニティをどう保全し創出していくかを考えることは重要な課題になるにちがいない。「わが村は美しく」コンクールにみられる評価の視点は、そうしたことを考える際の参考となろう。

最後に、貴重な機会を与えていただいた、東京大学農学部・井手久登教授、ドイツ連邦食料農林省のリンク博士(Dr. Ring)、連邦自然保護・地域生態学研究所のムラス所長(Prof. Dr. Mrass)に深く感謝したい。また、分析を手伝っていただいた恒川篤史さん(東大・院)にも感謝したい。

#### 引用・参考文献

- 1) 石光研二(1985): 西ドイツの農村整備(3) - 農地整備から農村整備へ: 農村工学研究 38 農村開発企画委員会 119 p.
- 2) 国土庁地方振興局(1987): 第1回農村アメニティ・コンクール 優良事例集 67p.
- 3) ノルトライン-ウエストファーレン州食料農林省(農村開発企画委員会訳 1974): わが村は美しく: 農村工学研究別冊 85p.
- 4) Siepman, K. E. (1986): "Unser Dorf soll schöner werden" 13 Bundeswettbewerb 1961-1985 im statistischen Überblick: Der Landkreis 2 79~81.
- 5) 杉浦清二(1985): 美しい村づくりへの課題 - 西ドイツにおける「わが村は美しく」コンクールの実態: グリーン・エージ 139 15~19

**Zusammenfassung:** In der Bundesrepublik Deutschland findet alle zwei Jahre der Bundeswettbewerb "Unser Dorf soll schöner werden" statt. Er hat zum Ziel, die Teilnahme der Bürger am Prozeß der Dorferneuerung und der Dorfverschönerung im ästhetischen wie im ökologischen Sinne zu fördern. Der Autor war eingeladen, als Gast der Bundesprüfungskommission das Bewertungsverfahren beim 14. Bundeswettbewerb im Jahre 1987 kennenzulernen. Die Ergebnisse der Bewertung wurden nach der Faktorenanalyse untersucht, wobei insbesondere zwei Bewertungskriterien sowohl die allgemeine wie die differenzierende Bedeutung der Gesamtbewertung erklären. Die Bewertung der Grünordnung einschließlich der Anlage von Biotopen ist das signifikanteste Element des Faktors I. Dies bedeutet, daß die Grünordnung das entscheidende Element in der Gesamtbewertung darstellt. Der Faktor II wird im Gegensatz dazu aus der städtebaulich/denkmalpflegerischen Gestaltung sowie der Bürgerbeteiligung gebildet. Dies sind Elemente, die im Entscheidungsprozeß unabhängig voneinander bewertet werden. Zusammenfassend läßt sich sagen, daß in der derzeitigen Bewertung die Erhaltung oder Schaffung ländlicher Ökosysteme gegenüber seinen Verschönerungsmaßnahmen deutlich bevorzugt wird.